

分野・専門名： ドイツ語圏文化学

試験科目： 独文解釈

【正解・解答例】

問題

正解・解答例

問1 Körper

問2 衣服は人間に最も身近な一群の物体として、自己の知覚の中に織り込まれており、身体境界が、いわば衣服の最も表層まで拡張しているように感じられるため。

問3 mit

問4 流行の、あるいは流行おくれの服を着ることで、人々は、自分がどのような社会的グループに属していると思われたいかを周囲に示している。

問5 ゲオルク・ジンメルが認めているように、個々人は常にその衣服によって、「個性化したいという衝動と集団に埋没したいという衝動のあいだ」にある二つの矛盾した傾向を結びつけようと試みるのだ。

問6 verstanden

問7 探求されるべきなのは、紳士服は、婦人服に比して流行の変化のサイクルに支配される度合いが少ない、という印象がどうして生じているのか、なぜその印象が、今日にいたるまで学問的に限定的にしか検証されてこなかったのか、ということである。

問8 雑誌やグラビア誌は、しばしば発行部数が多く、さらに次々と別の読者の手に渡ることで、多くの人々の目に触れることになるから。

分野・専門名：ドイツ語圏文化学

試験科目： 独文解釈

【出題の意図】

ドイツ語の一次文献・二次文献を読んで内容を的確に把握するための、基礎的なドイツ語力があるかどうかを問う。

分野・専門名： ドイツ語圏文化学

試験科目： 芸術・大衆文化

【正解・解答例】

(多様な解答があり得る。以下はその一例である。)

(A. Neue Frauen)

第一次世界大戦の敗北を受けてドイツ帝国が崩壊した後に成立したワイマール共和国では、男女同権が初めて認められ、女性たちが社会の様々な分野に進出するようになった。「新しい女」とは、このワイマール時代に出現した、都会的な生き方をする若い女性たちを指す。第一次世界大戦以前の女性たちとは異なり、彼女たちは、短髪で動きやすい服装をし、店員や事務員として働き、スポーツやダンスを楽しみ、性的な自由を享受しているというイメージで語られた。しかし、そのイメージは、多分に雑誌や映画などのマスメディアによって作られた部分があり、実際の社会的立場や経済的基盤は脆弱であった。ワイマール時代の代表的な女性作家イルムガルト・コインの『ギルギー私たちの一人』は、このような「新しい女」を題材にした小説であり、地方都市に住む 20 代の速記タイピスト、ギルギーが、社会の様々な矛盾の中で生き抜こうとする姿を描いている。

(B. Nachkriegszeit)

第二次大戦後のドイツ語圏における「戦後」は、国によって異なる経過を辿った。ナチス支配下にあったドイツは東西に分割され、西側に資本主義体制のドイツ連邦共和国、東側に社会主義体制のドイツ民主共和国が成立、ドイツに合邦されていたオーストリアは永世中立国となった。社会主義体制の東独では、その「戦後」は、ほぼ 1990 年の東西ドイツ再統一まで続いたと考えられる。一方、学生運動が高揚した 1968 年頃まで続いた西独の狭義の「戦後」では、戦争の惨禍や、ホロコースト、冷戦などが芸術の題材となった。この時期に特徴的な芸術ジャンルとしては、「ラジオドラマ」が挙げられる。テレビが普及する以前には、ラジオドラマは、多くのリスナーに同時に語りかけることができ、また聴覚的な実験もできる魅力的なジャンルだったのである。その代表作には例えば、一連の悪夢を描いて、心地よい現実の裏側に目を凝らすことを求めたギュンター・アイヒの『夢』が挙げられよう。

(C. Musikdrama)

「楽劇」とは、音楽と劇との一体化を目指したオペラの一形式であり、19 世紀のドイツを代表する作曲家リヒャルト・ワーグナーが創始した。従来のオペラとは異なる総合芸術としての「楽劇」は、音楽が途切れず流れるように進行すること（無限旋律）、人物の感情や状況を表すライトモチーフが導入されたこと、またオーケストラによる表現の幅が広がったことなどをその特徴とする。その代表作には、『トリスタンとイゾルデ』や『ニーベルング

の指環』がある。前者においては半音階進行の多用や無調が見られ、それは 20 世紀以降の音楽の誕生へと結びつくことになった。また、4 部作からなる後者では北欧神話とジークフリート伝説がそのモチーフとなっており、ドラマとしての一貫性が実現した。その 2 部作目『ワルキューレ』の中の一曲「ワルキューレの騎行」は、今日単独で演奏されることも多い。そのようなワーグナーの楽曲は、ブルックナーなど後の作曲家に多大な影響を与えた。

(D. Romantik)

市民階級の台頭により音楽を鑑賞する人口が拡大し、また産業革命によりピアノの性能が向上したことでより華麗な演奏が可能となった 19 世紀、ドイツやオーストリアを中心にして「ロマン派」と呼ばれる音楽様式が広まった。それ以前の、均整のとれた形式や理性的で客観的な表現が特徴である「古典派」とは異なり、「ロマン派」では、半音階、不協和音、転調などの技法が用いられながら、理性よりも人間の持つ感情を重視し、合理的な表現よりも情緒的で主観的な表現に重きが置かれた。主なロマン派の作曲家としては、シューベルト、ショパンなどが挙げられるだろう。シューベルトは「歌曲の王」と呼ばれ、歌曲集『冬の旅』など、美しい旋律や豊かな和声を用いて詩の内容を音楽で表現した。また、ショパンが作曲した曲は、『幻想即興曲』や『舟歌』など繊細で美しい叙情性を持つ、感性あふれる旋律が特徴であり、彼はしばしば「ピアノの詩人」と評される。

(E. Wien)

ウィーンは、西ヨーロッパと東ヨーロッパの境界線をなすオーストリアの首都として、地政学的にも重要な役割を果たしてきたが、19 世紀から 20 世紀にかけては、演劇や音楽、絵画、建築、工芸、デザインなどで、それぞれの分野を超えた新しい芸術を求める動き、「世紀末芸術」が黄金期を迎えた。例えば、グスタフ・クリムトはその代表的な画家である。クリムトの代表的な作品としては、『接吻』などが有名であるが、その作品には金箔がふんだんに用いられ、衣服には幾何学模様や花をモチーフにした華やかな装飾性にあふれる手法が見られるなど、世紀末の芸術運動であるユーゲントシュティールやラヴェンナのモザイク画、さらには日本美術などの影響が認められる。他方、クリムトの作品には、命、愛と幸福、女性とその官能性、死などのモチーフも多く見られ、同時代の文化・芸術運動を考察する際には欠かせない存在である。

分野・専門名：ドイツ語圏文化学

試験科目： 芸術・大衆文化

【出題の意図】

ドイツ語圏の芸術・大衆文化に関する基礎的な知識や、自分の研究テーマと結びつけて論じる論述力があるかどうかを見る。

分野・専門名： ドイツ語圏文化学

試験科目： 独作文

【正解・解答例】

問題 I

- 1) Im Sommer verbringen Kinder mehr Zeit im Internet als sonst. Viele Eltern sind besorgt über den dadurch entstandenen Einfluss auf Körper und Seele und über verschiedene Risiken, wie z.B. Verbrechen. Für Kinder ist das Internet eine Quelle des Wissens und sie finden ihren Platz da. Es fehlt ihnen jedoch Urteilsvermögen und Erfahrungen. Sichere Internetumgebungen für Kinder müssen Erwachsene organisieren.
- 2) Es gibt noch vieles, was Erwachsene tun können, damit Kinder nicht ungeschützt der Gefahr ausgesetzt sind. Es ist auch nützlich, ihnen bewusst zu machen, dass ihr Körper ihnen gehört. Die heutige Gesellschaft hat sich gegenüber vorangegangenen Generationen stark verändert.

問題 II

修士課程入学後の研究計画書が、ドイツ語で的確にまとめられているかどうか、特に以下の点について確認する。

- ・テーマは自由だが、ドイツ語圏文化学での研究としてふさわしいものであるか。
- ・文章の正確性、論理性（論理展開の妥当性）、文章構成の適切さ、文法的に正しいかどうか、表現の適切さなどを確認する。

分野・専門名： ドイツ語圏文化学

試験科目： 独作文

【出題の意図】

問題Ⅰ

日本語で書かれた文章について、そこで得られる情報をドイツ語で表現することができるかどうか問われる。その際、文の構成力や文法事項についての基本的知識、語句の適切な使用がなされているかどうか問われる。

問題Ⅱ

自分の考えがドイツ語で的確に表現されているかどうか、適切な語句や表現のみならず、文法の基礎的知識が正確に表現されているかどうか問われる。また、希望する研究テーマが相応しいものであるかどうか、それが読み手に伝わるように論理的に正しく表現されているかどうか問われる。

分野・専門名：フランス語フランス文学

試験科目：

【正解・解答例】

I

- 1) 中世フランス文学の知識と、その文化的背景の理解の程度を、論述文を通じて測定する。宮廷風恋愛が自分よりも身分の高い女性を対象とすること、騎士と奥方の関係には、家臣と君主のそれと類縁性が見られること、中世の抒情詩の多くのテーマが、宮廷風恋愛と結びついていること、などが解答のポイントとなる。
- 2) 記憶というのは文学の根幹に関わる問題である。ほとんどの文学作品は、個人的記憶（例えばルソーの『告白』以降の自伝文学の伝統）や集団的記憶（歴史的出来事を主題に取り込む作品、ユゴーの歴史小説はその一例）、あるいはその双方に基づく記録（口承、あるいは文字テキスト）に関わる側面を持つ。主題の扱いだけでなく、記憶をいかなる形式・媒体・語りの構造で表現するかという点も論の焦点となりうる。古代ギリシア・ローマの修辞学における記憶術の技法が物語構築に影響を与えたともみなす見方もある。哲学でもプラトン以降扱われるテーマであり、近代ではベルクソンの持続概念、リクールの記憶論などに展開している。フロイトやユングが扱った無意識と夢の問題とも関わりうる。意識と時間を主題にした作品としては、プルーストやネルヴァルの作品が挙げられる。時間の非直線的表象は、20世紀のヌーヴォー・ロマン（例えばデュラスの『愛人』の螺旋的時間構造）においても重要な探究対象となった。例として挙げたのは散文作品であるが、戯曲や韻文作品についても多くの例が挙げられる。
上記は考えられうるアプローチのごく一例であり、求められるのは、解答者の独自性、フランス文学についての理解と知識、そして論理性である。複数の時代の作品について論じることが理想的ではあるが、1つの作品（あるいは作家）に絞った上で考察を深め、文学史的な展望のもとに、論じることが評価される。
- 3) フランス語の話し言葉と書き言葉の違いを、文法、語彙、表現方法といった多角的な視点から具体的に説明できるかどうかを測定する。書き言葉にしか現れない動詞時制（単純過去など）、書き言葉における倒置疑問の多用、話し言葉における否定の *ne* の省略、話し言葉における間投詞やオノマトペの多用、話し言葉におけるフィラーの多用などの現象をなるべく多く取り上げ、それらを体系的に整理して論述することが解答のポイントとなる。

II

A) (解答例)

中世においては、文字を読むことができることはさほど珍しいことではないが、できる場合でさえも、自分で読むことはあまりなかった。聞いたのである。貧しい人は、ジョン・グールドの言葉をその場で聞いたし、権力者は自分の広間で、礼拝堂付き司祭の言葉を聞いた。ジャン・フロワサルは、自分の『年代記』の中で、1388年の秋、オルテに滞在中、毎晩登城して、フォワ伯ガストン・フェビュスに、その膨大なロマン『メリアドール』を朗読したと誇らしげに語っている。

あらゆる物が聞かれた。歌はもちろん、詩もロマンも、年代記も、聖史も。しかし、だが、その歌、その詩、そのロマン、その年代記を、私たちもまた知っている。私たちがそれらを知っているのは、それらを読むことができるからだ。私たちがそれらを読むことができるのは、それらが書かれたからだ。それらは、写本の中に手で書き写された（印刷術はまだ発明されていない）。羊皮紙の上に、それから中世末期には紙の上に。

それらはあるものから他のものへと書き写された。中世の文学は耳で聞くために作られた。中世の文学は耳を通して消費された。だが、文字によって保存され、文字によって広められた。写本は読まれ、挿絵がついている場合は眺められ、流通し、再度書き写されるために借り出された。

中世の世界は、なによりまず、口頭の世界である。中世の世界はなによりまず、文字の世界である。どちらも正しい。

口頭の世界であるのは、文学が声によってのみ生命を得たからである。文学は口承で伝えられた神話や伝説から養分を得た。また、あらゆる公的行為、宗教行為は陳述され、明言された。

文字の世界であるのは、証拠となるのは、書かれ、印を押された文書だったからである。また、宗教は『聖書』に基づいている。さらに、全ての人間の行動は、大きな書物の中に書き込まれ、最後の審判の日に提出される、と言われていた。「書かれた書物が運ばれてくる。その中には全てが書き込まれている」と『怒りの日』は歌っている。

B) (解答例)

発話者は何かに言及するだけではない。言語は内容を伝えることを唯一の機能として
いるわけではなく、活動でもあるのだ。全ての発話は、それが伝える内容に加えて、
応答者に対してある種の言語行為—約束する行為や質問する行為や脅迫する行為など
—をなし遂げているのである。それぞれの発話行為において、応答者は自分がどのよ
うな種類の行為に関わっているかを識別し、その行為に対して適切なやり方で振る舞
わなければならない。発話はある発話内的な力(約束や質問など)に影響を受けている
と言われている。このように、発話は二重の側面を持っているのだ。すなわち発話は
発話行為というただ一つのことによって、内容を伝えると同時に行為をなし遂げるこ
とを可能にしているのである。(人は実際に宣言することなしに「私は宣言する」と言
うことはできず、また「私は宣言する」と言うことによってしか宣言することはでき
ない。)この観点からは、全ての発話は固有の発話行為を映し出していることにな
る。

言語学者は発話の意味を記述するためにこの発話内的な力を考慮する必要はなく、こ
の力は言語学者にとって外部にあるものだと言って、人々は異議を唱えるかもしれな
い。そういった立場は多くの困難を引き起こすことになるだろう。例えば、命令法の
動詞は、命令という発話内的な価値を持っているが、全ての断定的な発話のように、
ある状態を真であるものとして表現するのではなく、ある状態を応答者によって実現
されるべきものとして表現するのである。この応答者は結果的に従う/従わないという
二者択一の前に立たされるのであり、そこにおいては表現される内容と発話内的な力
を切り離すことはできないのだ。命令を与えながら、話し手は自分自身と応答者に相
補的な社会的役割を割り当てているのである。言語行為の分析は、談話の活動が社会
的に認められた様々な言語行為に対応する慣習上の役割の全体を定義している制度に
基づいているという考えに行き着くのである。厳密な意味での統語論的、意味論的な
規則の先に、言語の正しい使用をつかさどる規則が存在しているのだ。このようにし
て、断言という行為を行うためには、断言することを信じていなければならない、約束
を果たすためには、約束することを行うという義務を負わなければならないといった
ことが、慣習によって一般に認められているのである。

分野・専門名：フランス語フランス文学

試験科目：

【出題の意図】

I

- 1) 中世フランス文学の知識と、その文化的背景の理解の程度を、論述文を通じて測定する。
- 2) フランス文学史についての幅広い知識と、自らの研究に結びつけた独自の見解、また論の構成力と記述能力を問う。
- 3) フランス語の話し言葉と書き言葉の違いを、文法、語彙、表現方法といった多角的な視点から具体的に説明できるかどうかを測定する。

II

- A) 中世フランス文学の特性を論じた文章を題材とし、フランス語を正確に理解する能力と文法や語彙の知識を測定する。
- B) 遂行的発話の特性を論じた文章を題材とし、フランス語を正確に理解する能力と文法や語彙の知識を測定する。

分野・専門名： 日本文学

試験科目：日本文学評釈[一]

【正解・解答例】

問一 この雪がすこし解けてから、源氏の君は大堰の邸にお越しになった。明石の君は、いつもは源氏の君のお越しをお待ち申し上げているのに、あの（姫君引き取りの）件なのだろうと思われることなので、胸がつぶれる思いがするが、それも人のせいでなくわが身のいたらなさによるのだと思われる。 （姫君をお渡しするのもしないのも）私の心次第だろう、源氏の君も私がお断り申し上げるのを強引に取り上げたりなさるまい、しかたない、と明石の君には思われるが、軽々しいようだと思いついて思い返す。姫君がたいそうかわいらしい様子で前に座っていらっしゃるのを源氏の君はご覧になるにつけても、並々のものとは思われ難かったこの人（明石の君）との宿縁であった、とお思いになる。姫君は、この春からのばしている御髪が、尼そぎといった感じでゆらゆらとしているのが素晴らしく、顔つきや目元のうつくしさなど、今さら言うまでもない。姫君を他人のものとして遠くから思いやることになる、その親心の惑いの闇を、源氏の君は想像なさるにつけてもたいそういたわしいので、繰り返して夜明けまで慰めなさる。「いえ何の、この私のようにみじめな身のほどでないように姫君をお世話くださるのでしたなら」と申し上げるものの、こらえきれずに泣く明石の君の様子は、痛々しい。

姫君は無邪気に、御車に乗ることをお急ぎになる。車を寄せたところに、母君みずから抱いてお出になっている。姫君の片言の声はたいそうかわいらしくて、袖をつかんで「お母様もお乗りになって」と引くのも、たいそうつらく思われて、

末遠き～（行く末遠い二葉の松、まだ幼い姫君と別れて、いったいいつ、私はこの子が大きくなった姿を見ることができるのでしょうか）

終わりまで言えず、ひどく泣くので、源氏の君は、それももつともだ、ああつらい、とお思いになって、

「生ひそめし～（小松が生えはじめた根も深いことから、こうしてこの子が生まれてきた宿縁も深いことから、武隈の相生の松、私たち夫婦二人に、小松のこの子を並べて、末長く一緒に過ごそう）

安心して待っていなさい」とお慰めになる。明石の君は、そうなること（いずれ姫君と一緒に暮らせること）と思って気持ちを静めるが、とてもこらえきれないのであった。

問二 薄雲巻。明石の君は、明石を離れ、母尼君、姫君と大堰の邸に身を寄せている。唯一の女子である明石の姫君の将来の入内を計画している光源氏は、実母明石の君の身分の低さが傷となることから、紫の上の養女として育てることを提案する。娘の将来を願い、

泣く泣く姫君を光源氏に託す場面である。薄雲巻では、明石の君母娘の別れと、藤壺の死が重要な話題として語られる。

分野・専門名：日本文学

試験科目：日本文学評釈（一）

【出題の意図】

問一 古典文法・語彙・和歌の知識を踏まえ、正確に古典の文章を読解し、物語の内容を把握できる学力を問う。また古文の文章をわかりやすい現代語に訳する能力を問う。

問二 日本の代表的な古典作品である『源氏物語』の基本的な内容を把握していることを問う。

分野・専門名：日本文学

試験科目：日本文学評釈[二]

【正解・解答例】

問一

壺公 同上

後漢の代に当て市中に出て薬を売る老翁あり。一の壺を市の許に懸置て商賈止ときは即壺中に跳入る。故に壺公と名付。人これをみる事なし。費長房といふ者市の掾とて盜賊等の非義を見糺す奉行なり。高楼より此を窺見て奇異の思ひをなし、楼を下り、酒脯を携へ、翁の前に再拝て、饗応をなしけり。翁の曰、「明日更に此に来れ」と。長房翌朝に果して往く。翁よろこびて乃俱に壺中に入る。みれば珠玉を鏤飾たる堂ありて、旨酒甘肴、其座に盈衍たり。共に飲をはりて出れば素の小壺なり。翁長房にいましめていわく、堅他に語る事なかれと。其後長房仙術を求めんことを欲て翁に伴て山中に入たれども、其行ならずして、遂に故郷に帰る時に翁一の符を作りて長房に与へ、地仙となりて、衆の鬼神を主ことを得さしめたり。又費長房鶴に乗といふは、搜神後記に丁令威が鶴に化して遼東に帰ることあり〈丁令威は／長房とぞ〉是に拠もの歟。

問二

後漢時代、市場で薬を売る老人（壺公）は、商売が終わると壺の中に飛び込んで姿を消していた。役人の費長房が高楼からこの奇異な光景を目撃し、酒と干し肉を持参して老人にもてなしをした。老人は、翌日長房を壺の中の世界に招待した。壺の中には美しい宮殿があり、上質な酒と料理が豊富に用意されていた。二人は共に飲食を楽しんだが、外に出ると元の小さな壺に戻っていた。老人は長房にこの体験を他言しないよう戒めた。その後、長房は仙術を学ぶため老人と山中で修行したが成就せず、故郷に帰る際に老人から特別な符を与えられ、地仙となって鬼神を支配する力を得た。

分野・専門名：日本文学

試験科目：日本文学評釈[二]

【出題の意図】

江戸時代まで日常的に用いられた「くずし字」（草書体・行書体で記された仮名・漢字）を正しく翻刻し、文学作品の写本や版本の内容を正確に読解することができるか。

分野・専門名： 日本文学

試験科目：日本文学史[一]

【正解・解答例】

なし

分野・専門名： 日本文学

試験科目：日本文学史[一]

【出題の意図】

古代から近現代にいたる、日本文学史および書誌学に関する幅広い知識を問う。自身の設定したテーマに沿って、明快に論述できる学力を問う。

分野・専門名： 日本文学

試験科目：日本文学史[二]

【正解・解答例】

- ① 『万葉集』巻五所収の、山上憶良作の長歌および本歌からなる挽歌。晩年、大宰帥となった大伴旅人は妻を伴い筑紫に下るが、間もなく妻は世を去る。妻を失った旅人の立場で筑前守憶良が詠んだ挽歌であり、旅人に献呈された。これを契機に二人の交流がはじまり、いわゆる筑紫歌壇が形成される。直前の悼亡文・詩に対して和歌であることを強調して「日本」と称した。
- ② 折口信夫（釈超空）の小説。二上山に葬られた大津皇子（滋賀津彦）の靈魂が復活する。皇子の靈に感応した藤原南家の郎女は家を出奔し、当麻寺に至る。郎女は、皇子の高貴な姿を蓮糸で曼荼羅に織り上げる。天平時代を背景に、天武皇子として卓抜な資質に恵まれながらも刑死した大津の悲劇と、当麻寺曼荼羅にちなむ中将姫伝承を結び付けた、幻想的な作品。
- ③ 鎌倉時代、藤原定家が藤原良経の命により編纂した物語秀歌選。『百番歌合』と『後百番歌合』の計二百番からなる。前者は『源氏物語』と『狭衣物語』の和歌各百首を左右に歌合形式につがえたもの。後者は『源氏物語』百首と『夜の寝覚』『浜松中納言物語』その他の物語の和歌百首を左右につがえる。定家の物語和歌の好みがかげえ、また散逸した物語の内容を知る上での貴重な資料でもある。
- ④ 平安時代初期の歌人。阿保親王（平城皇子）の子。業平の兄。『古今集』離別の「立ち別れいなばの山の峰におふるまつとし聞かば今帰り来む」は『百人一首』にも選ばれ有名である。主催した『在民部卿歌合』は最初期の歌合であり、『古今集』成立前夜の和歌振興の一翼を担った。政治上の理由で一時須磨に退去していたこともあり、「わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつつわぶと答へよ」（古今・羈旅）は、その時の作である。須磨流謫は『源氏物語』の光源氏のモデルともなり、謡曲『松風』の素材ともなった。

- ⑤ 江戸後期天明年間（1781-89）は狂歌史上の黄金時代であった。それまで狂歌の中心は上方にあったが、明和年間に江戸山の手で新たな運動が起こった。内山賀邸を中心とした唐衣橋洲、四方赤良（大田南畝）らの武士・町人による少数グループから始まり、機知滑稽を好む江戸市民に広まって急速に発展した。天明期には狂歌書が大量刊行され爆発的流行となったが、これは質的低下の始まりでもあった。寛政改革により武士作家が退陣し、町人中心の職業化が進む中で天明狂歌は終焉を迎える。
- ⑥ 『和字正濫鈔』は僧契沖が著した五巻五冊の仮名遣い書。契沖は『倭名類聚抄』以前の文献において、いろは四十七文字の用法に混乱がないことを発見し、これを仮名表記の基準とした。「い」「ゐ」「ひ」「を」「お」「ほ」「え」「ゑ」「へ」等の項目下に、その仮名を含む語をいろは順に配列し出典を注記した。中世以来権威であった藤原定家の仮名遣いが基準不明確だったのに対し、本書は明確な根拠を示したため国学者に広く受け入れられ、後の歴史的仮名遣いの基礎となった。
- ⑦ 読み本系に分類される『平家物語』の古写本の一つ。一般的な平家物語が和漢混淆文で書かれるのに対し、本書は真名（漢字）で記され、千葉氏・梶原氏・熊谷氏など坂東平氏の武士団の活躍を詳述する点が特色である。巻1上・巻1下・巻5・巻8上・巻8下の5冊が現存し、内閣文庫にのみ伝わる唯一の伝本。作者・成立年は未詳だが、巻1下末の識語により建武4年（1337）書写本を文和4年（1355）に再写したことが判明。成立時期については13世紀後半から14世紀前半の諸説がある。
- ⑧ 藤原定家が選んだ秀歌集で、百一人の歌人から各一首を収め、作者名と勅撰集名を付す。成立は文暦二年（1235）以前とされ、後鳥羽院・順徳院が含まれないため、百人一首より先行すると考えられる。定家の日記『明月記』の記事とも符合し注目される。百人一首と九十七首が共通し、異なる歌人や歌もある。百人一首が時代順で配列するのに対し、百人秀歌は歌合形式を重視した構成となっている。

分野・専門名： 日本文学

試験科目：日本文学史[二]

【出題の意図】

古代から近現代にいたる、日本文学史および書誌学に関する幅広い知識を問う。

分野・専門名： 中国語中国文学

試験科目： 専門科目

【正解・解答例】

大問 1

a. “受事主语句”

【解答例】

“衣服都洗干净了。”のように動作・行為の受け手が主語となった文。視点が受け手の側に置かれることから「意味上の受け身文」などとも呼ばれるが、この場合には受け手が主題化された形となっており、通常の受け身文とは性格を異にする。

b. 形容詞句

【解答例】

形容詞が中心語となったフレーズのこと。その構造として「修飾構造(例: 非常高兴)」、「動補構造(例: 高兴得很)」や「並列構造(例: 又便宜又好吃)」などが挙げられる。また、形容詞句は形容詞の場合と同様に、「主語、目的語、述語、連体修飾語、連用修飾語、補語」といった各種文成分になることができる。例えば“非常认真地工作”は形容詞句が連用修飾語となった例である。

c. 『玉篇』

【解答例】

梁の顧野王撰。『説文解字』の部首分類を継承しつつ、部首の配列には『爾雅』に見られるような類概念を導入した。全ての見出し字に反切を付し、字義は主として経傳の注や『説文解字』などの引用により示している。説義が煩瑣だったため大幅に削減され、簡素化された一方、増字され、宋代に『大廣益會玉篇』という形で集大成された。

d. 鄭玄

【解答例】

後漢の學者。『毛詩故訓傳』に注を附した(鄭箋)ほか、『周禮』、『儀禮』、『禮記』に附注するなど、後の漢唐注釋學の基礎を築いた。

e. 田漢

【解答例】

長沙出身。1910-20年代に日本に留学し、東京高等師範文科で学び、近代劇、映画に傾倒し、郭沫若らと知り合い創造社結成に参加、留学中は主要な同人として活躍した。帰国後も佐藤春夫や谷崎潤一郎らと交友し、また南国劇社を組織し『南国』を創刊するなど中国近代劇運動の推進に大きく貢献した。1930年代には左連に参加し、彼が作詞した「義勇軍行進曲」は中華人民共和国の国歌に指定された。人民共和国建国後は文化部や戯劇関係の重職を歴任したが、文化大革命において文化界の主要な打倒の対象とされ、獄中死した。改革開放後、名誉回復され、高く再評価された。

f. 新感覚派

【解答例】

新感覚派は1920年代のモダニズム文学の流れを受け、1930年代上海モダン都市文化を描く文学思潮を指す。横光利一ら1920年代日本の新感覚派の影響を受けた作家もあり、短い文、畳みかけるフレーズや単語の連続、意識の流れなど実験的な文体をしばしば用い、ダンスホールやデパートなどを舞台に都会の消費文化や風俗を描いた。上海の大学で学んだ青年作家たち、施蛰存、穆時英、劉呐鷗らが代表的である。

g. 正末

【解答例】

元雜劇の角色(脚色;役柄)の一つで、男性の主役。この名稱は宋雜劇・金院本の「末泥」に由来すると考えられている。元雜劇では、一つの作品内では正末(または正旦)のみが歌唱を行い(一人獨唱)、正末が歌唱を行う作品を末本と呼ぶ。

h. 『今古奇觀』

【解答例】

明末に刊行された短編白話小説集。抱甕老人編。三言(『喻世明言』『醒世恒言』『警世通言』)・二

拍(『初刻拍案驚奇』『二刻拍案驚奇』)から四十篇が選ばれている。清代には、源流となった三言二拍よりも『今古奇觀』の方が廣く流行し、江戸時代の日本文學にも大きな影響を及ぼした。

i. 宋玉

【解答例】

戦国時代末期楚の国の賦作家。その作風は屈原を引き継いでおり、『楚辞』に作品がおさめられる他、神女との交歓を描いた「高唐賦」、自分が美男子でも好色ではないことを弁明した「登徒子好色賦」などの作品が『文選』におさめられる。

j. 三蘇

【解答例】

蘇洵・蘇軾・蘇轍の父子三人をまとめて指す言葉。蘇軾・蘇轍兄弟は若くして科挙に上位合格し、その父親として蘇洵は名士として時の文壇に迎え入れられた。蘇軾は、北宋代きっての詩人であり、弟の蘇轍は兄と仲がよく、兄との唱和の詩を多く残す。三人とも唐宋八大家に数えられる。

大問 2

2A

(1) 音声によって伝達される話し言葉と文字によって伝達される書き言葉それぞれの特徴について、両者の違いを踏まえつつ、一般言語学的な知識を用いた記述ができるかを問う問題である。中国語では“男、銀”のように語として単独で使用できないものが、書面語では使用が可能となる。また禁止表現では“请勿”が用いられるなど、中国語学習者は書面語に関して、別途学習する必要に迫られる。こうした状況については「語彙、文法、表現」といった多角的な側面からの言及が可能である。

(2) “怎么”の方法を尋ねる用法と原因・理由を尋ねる用法の使い分けについては、否定形で用いることが可能かどうか、形容詞や主語をその後に置くことができるか否かといった点は押さえておきたい。原因・理由を尋ねる疑問詞“怎么”と“为什么”はともに日本語では「なんで」と訳されるもので、その使い分けは中国語教育においてもしばしば取り上げられる。“怎么”については自問や反語など、必ずしも相手に回答を求めるわけではない状況下でも用いられる。一方、客観的事象について、相手に理由を求めるような状況下においては、“为什么”が選択

される。このように、分析の際には事柄に対して抱く発話者の認識に着目することにより、両者の相違が比較的明確に捉えられる。“怎么”と“为什么”の両者が互いに言い換えが可能なケースも含めて、上記事象に言及する際に、それぞれ適切な例を示すことができるかといった点も評価の対象に含まれる。

2B

(1) 六書の内には、天文、地理、人事の三才全てが備わっている。

もしかりに、自然界の鳥獸蹠迹の迹(を模して創られた文字)に因って自然界の法則を求め、文字を通して聖人の教導を稽考し、文字を通して萬物の攝理に通曉することができるならば、文字を起點として、心を正しく保ち、身を善く脩め、家庭を整え、國を治め、天下を平らかにすることは、いずれも自然に任せて無理をせず淡々で行うことができるだろう。

文字に對して牽強附會な態度を取る者は、必ずことばに對して牽強附會な態度を取る。ことばに對して牽強附會な態度を取る者は、必ず攝理に對して牽強附會な態度を取る。攝理に對して牽強附會な態度を取る者は、どこに行こうとも道に背くものだ。その極めつけは、天地の本來占めるべき位置を失わせ、萬物にもともと備わっている性質を失わせるほどである。ゆえに、格物致知にとって最も厄介なのは、牽強附會な態度なのである。牽強附會が厄介なのは、なにも六書の解釋に限ったことではないのだ。

(2) ①『論語』學而篇の「巧言令色鮮矣仁。」を典據とする。

②『論語』子路篇を典據とし、許慎が『說文解字』自敘末尾においてこのことばを用い、分らないことについては憶測を述べることを慎しむという學問的良心を表明している。

2C

実のところ私だけでなく、私の天津中西女子中学[学校であることを理解している訳なら可とする]での親友のうち、何人もが巴金に夢中になって、彼のほとんどの作品を一通り読み、そこから激励と力を得ていた。巴金の小説は青年にとって特に魅力があった。大勢の青年が巴金に手紙を書いていただろう。私は何年もたってからようやく、私が巴金と文通を始めたほぼ同時期に、クラスメートの劉嘉葵も彼に手紙を書いていたことを知った。1985年彼女との手紙のやり取りでもこの話が出て、彼女は三月八日婦人デーによこした手紙にこのように書いている。「私ははっきり覚えています。当時私は十二・九運動に巻き込まれた際に、心は火のように燃え盛り、血管に流れる血は煮えたぎり、破裂しそうで、十八歳の一人の若者には燃えさかる火と破裂しそうな血管が耐え切れず、その火、その血を耐えるのを助けてくれる支持者、耐えてくれる人を求めていました。巴金先生がその役割を引き受けてくれたのです、彼は私たちの当時のあん

な幼稚でおかしな考え方や行動を理解し、共感し、支持してくれました。私が彼に、壁新聞や、キャンプファイヤーの集い、墻子河の真ん中までボートを漕いでいって大声で歌う活動について話すと、彼は完全に私たちを理解し共感してくれたのです。私の心は慰められました。」劉嘉秦は延安へ着いた当初やはり巴金に手紙を書き、巴金は彼女が正しい道を行っていると呼び賛した。

当時私も巴金のところに慰めてほしくて手紙を書いていたのだった。そのころ私は特に苦悶していた。たくさんの原因があつて、一つには前述の十二・九運動であり、一つには兄が留学に行つて以来、特別に寂しく思っていた。兄は私を特にかわいがつてくれて、私はいつも彼に付きまとい、何でも彼の言うことを聞いて、一種依存のような感じだった。一度は階段をのぼりながら、顔を上げて空中に向かつて「兄さん der」と叫んだので、従弟の楊紘武が聞きつけて、母に、六番目の姉さんはお兄さんが恋しいんだよと言った。私はずっと兄を「兄さん der」と呼んでいて、それは笑える話をもとになっていた。八番目の叔父の家の四番目の兄と七番目の叔父の家の五番目の兄と、私の兄が私を連れて一緒に遊んでいて、彼らと兄はみな新学書院で学んでいて英語が出来たので、私に兄を「dear 兄さん」と呼んでみなさいというのだが、私はdear と発音できず、言ってみると「der」になってしまうので、彼らは面白がつて、いいよ、それじゃ「兄さん der」と呼べばいいというので、その後ずっとそう呼んでいたのだ。私はいつも兄の後をついていき、年を取ってから姉は、私と兄はワンセットだと言っていた。

巴金は私の崇拜するアイドルだった。一度は、私に対して、彼はまたお兄さんと同様に、兄の代わりになってくれた。まさに苦悶の中で私は手紙を書きはじめたのだ。巴金から初めて手紙をもらった時、私はすっかり舞い上がり、その数日は誰かを見かけるたびに「巴金から直筆の手紙をもらったのよ！」と抱きついて言いたくてたまらず、思うたびに笑いがこみあげて、夢じゃないかしらとも思った。本当のところは、手紙はこっそりと書いたもので、受け取った手紙も公開できなかったし、特に母には隠さなければならなかった。

私は最初の手紙に彼の作品が好きであると書き、彼への崇拜の思いを書き、その後ゆつくりと、他人には言わない話をなんでも彼に打ち明け、どんなことでも彼の意見を聞くようになった。どれも長い手紙で、私は夢見るのが好きで、夢がたくさんあり、手紙の中で彼に向つて私の一つ一つの夢を語った。私は友人に書く手紙がいつも長くなってしまうのだが、巴金への手紙は特に長く、何年も後になって彼は友人の前で私をからかつて、君の手紙で十七枚におよぶのもあったねと言ったものだ。

二通目の手紙だったか、私は自分の家への不満について言及し、ポイントとしては、巴金の描いた覚慧になりたいと表明した。彼はそれには賛成しないという意見を寄越し、私は若すぎるから、先ずはしっかり勉強して、辛抱するやうにとのことだった。当時私は彼と劉嘉秦との間の文通を知らなかったの、勿論彼女が延安へ行くことは「正しい道を行っている」と称賛したことも知らなかった。でなければ私はたぶん、なぜ劉嘉秦が自分の道に行くのには賛同したのに、

私が覺慧のようにするのは賛同してくれないのと尋ねただろう。彼は、君と彼女とでは状況が違うのだよと答えたかもしれない。今考えてみれば、劉嘉棻が当時既に延安に到着していなかったら、彼の回答も違っていたかもしれない。巴金は常に青年を愛護し、青年のためを思ってくれたのだ。

2D

(1) 智清長老が、「そなたはわが兄弟子智眞大師が、この寺に身を寄せ役僧となるよう推薦して來られたわけだが、わが寺は酸棗門外の東嶽廟の隣に大きな菜園を持っておる。そなたはそこへ行って運営管理するがよい。毎日、畑仕事をする者に十荷の野菜を納めさせ、残りは全てそなたが使ってよい。」と言うと、魯智深は、「師匠の智眞長老はわたくしに貴寺で役僧にしてもらうようにとのことだったのに、都寺や監寺にしてくれずにわしに菜園の管理をしに行けとはどういうことだね。」と申します。首座が、「あなたはおわかりでないですな。あなたは新たにいらしたばかりで、これといった功勞も無いのに、いきなり都寺になれるものではありません。この菜園の管理も立派なお役目ですぞ。」と言うと、智深は、「わしは菜園の管理などせぬぞ。どうしても都寺か監寺になりたい。」と言います。

(2) 問一：本書は、奇妙奇天烈な話や、荒唐無稽な物の記述が多く、往々にして、その中に残された文や貴重な書物(の引用)がまじっている。そのために、論者はその浮ついた内容に困惑しながらも、引用しない訳にはいかないのである。唐代以来、小説の優れたものとされているので、却けるわけにはいかないのである。書名を『酉陽雜俎』というのは、梁の元帝の賦にある「酉陽の逸典を訪ふ」という語から取っているのだろう。二酉は蔵書の意味である。その子目(篇名)に諾皐記とあるのは、呉曾の『能改齋漫録』で、諾皐を太陰神名としており、その語は『抱朴子』に基づくというのだが、本当かどうかはわからない。それ以外の貝編・玉格・天咫・壺史などのもろもろの篇名についても、わかるものとわからないものとの間にあって、深く考察することができない。

問二：筆記という資料の性質についての正確な知識と、自分の研究との関わりが把握できているかについて論理的に書けているかによって採点する。

分野・専門名： 中国語中国文学

試験科目： 専門科目

【出題の意図】

大問 1

中国語学・中国文学に関する基礎知識を測る。

大問 2

2A

(1) 個別の言語研究を行う前提として、一般言語学の知識は欠かせない。その上で、研究対象となる中国語という個別言語に当てはめた場合、どのようなケースが該当するのかを問うことにより、中国語学に関する専門知識に基づいた考察力を測る。

(2) 本問は前半では 1 つの語の意味的な使い分けを通して、また後半では当該の語と関連する類義語の用法との異同を通して、中国語の文法知識を問うことを主目的とし、知識と表現力を総合的に評価する論述式の問いとなっている。

2B

中国古典語学において必要な専門知識を問う。

2C

近現代中国文学に関する現代中国語の文章を、文脈を把握しつつ、正確な日本語に翻訳する力を問う。

2D

(1) 中国古典(白話)の語彙・語法の知識と、古典文学(白話)の文章を正確に理解する力を測定する。

(2) 中国文学史に関わる資料について、専門的な知識を持っており、読解ができるかを問う。

分野・専門名： 哲学

試験科目： 英語

【正解・解答例】

- (1) 不安は、(私たちの承知のうえであろうがそうでなかろうが) 私たち自身の差し迫る死の感覚によって起動され、自己反省や自己理解や「本来的な在り方」へと私たちを向ける気分である。だから、気分(と少なくともいくつかの情動)は、私たちが世界について発見することを可能にするだけではなく、自分自身について発見し人生を変えるような決意に駆り立てる可能性もあるのである。
- (2) 第一に、サルトルは、ジェームズが情動的経験の本質的構造、すなわち、志向性を無視したということを指摘している。
- (3) サルトルは、(彼は“mauvaise foi (自己欺瞞)”という言い回しをまだこの時点では造り出していないが、もしそうしていたとしたら) 私たちが自分の情念を制御できないと信じることは、もう一つの「自己欺瞞」の戦略、自分の在り方、自分の為すこと、自分が感じることに對して自分の責任を否定するやり方にすぎない、と言うだろう。

分野・専門名： 哲学

試験科目： 英語

【出題の意図】

本英語問題では、名古屋大学大学院人文学研究科哲学分野・専門博士前期課程に入学して、英語で書かれた哲学に関する学術誌や書籍を読み、それらを的確に読解し、哲学的な意義を把握する能力を持っているかを問う。具体的には、20 世紀の哲学者たちの情動や気分について考察に関する文章を題材とし、英文を的確に読解する力と文法や重要な語彙の知識を測定する。

分野・専門名： 哲学

試験科目： フランス語

【正解・解答例】

1. なにゆえこの生産的活動性は、その活動が努力（コナトゥスでも可）に見えてしまうような障害物に出くわすのか。
2. この力能はいかにして人間の水準において自らを顕現させるのか。
3. 第一に、分割不能 *individuelles* な諸物があり、それらは還元不能な現実性を有しているということ、第二に、すべてが徹頭徹尾、可知的であるということ。そしてこれら二つを結びつけることで、われわれは分割不能な本質があることを肯定することができる、ということ。

分野・専門名： 哲学

試験科目： フランス語

【出題の意図】

1. 基本的なフランス語文法とともに、スピノザの「コナトゥス」概念の意味を知っているか、あるいは知らずともそれを予測・想像できるかを試す。
2. 同上
3. 文脈の理解度とともに、要点を適切に抜粋し、整理できるかを試す。

分野・専門名： 哲学

試験科目： 専門問題

【正解・解答例】

この問題に唯一絶対の正解はないが、優れた解答は以下の観点から総合的に評価される。

知識・理解力：

参照する哲学的立場や議論の核心を正確に捉え、その思想がどのような文脈や問いから生まれたのかを理解した上で、適切に説明できているか。単なる用語の羅列や受け売りの説明ではなく、内容を自らの言葉で咀嚼し、再構成できているかが問われる。

分析・批判的思考力：

参照する哲学的立場を、その長所や短所、歴史的な文脈や現代的意義など、多角的な視点から分析・検討できているか。単に学説を要約するだけでなく、その議論の前提となっている問いや論理構造を批判的に捉え、テーマに対する深い洞察を示せているかを評価する。（複数の立場を比較検討する場合も、この基準が適用される。）

論理性・構成的力：

記述されている内容について、その根拠や理由が明確に示されているか。文章全体がテーマに即しており、部分間のつながりが論理的で、矛盾や飛躍のない一貫した議論となっているかを重視する。

表現力：

哲学的思索を、曖昧さを排した明晰かつ的確な語彙と文章で表現できているか。複雑な概念を平易な言葉で説明したり、専門用語を正確に用いたりする言語運用能力を評価する。

分野・専門名： 哲学

試験科目： 専門問題

【出題の意図】

本問は、哲学における根源的なテーマである「他者性」について、特定の学説の知識量だけでなく、歴史的・現代的を問わず様々な哲学的議論を主体的に理解し、それらを批判的に考察しながら自らの見解を論理的に構築・表現する能力を総合的に評価するものである。

分野・専門名： 西洋古典学

試験科目： 西洋古典学（問題1）

【正解・解答例】

解答のポイント

クリエンテス

・クリエンテスは、パトロヌス（庇護者）によって庇護される被庇護者を意味する。両者は、庇護するもの・庇護されるものという関係性だけではなく、共に何等かの便宜をとり図る相互扶助関係が存在する。たとえば、クリエンテスがパトロヌスの商売の店舗を任されていたり、選挙の際に応援に回る一方、パトロヌスは経済的・社会的支援を行っていた。

・古代ローマにおいてクリエンテスは朝の伺候（*salutatio*）をパトロヌスに対して行い、その結束が日々維持された。

航海

・航海が作品の主題となるものにはどのような作品があるか（例：『オデュッセイア』、『アエネーイス』、『アルゴナウティカ』）。

・それぞれの作品中で、航海がなぜ必要とされるのか。例えば、『オデュッセイア』においては故郷への帰還のため、『アエネーイス』においては新国家建設のため、など。

・西洋古典文学作品において航海を扱った作例がどのように後世の西洋古典文学作品に影響を与えたか。

酒

・酒にまつわる神にはどのようなものがあるか（例：ディオニュソス、バックス）。

・神話や文学作品で酒がどのようなコンテクストで登場するか（例：犠牲、誓い、吊い、哲学的議論、社交）。酒が犠牲や誓い、吊いの場で登場する作例にはどのようなものがあり、具体的にはこういった場面で用いられているか。

分野・専門名： 西洋古典学

試験科目： 西洋古典学（問題1）

【出題の意図】

西洋古典世界の文学作品や社会を理解する上で重要な要素となるトピックを理解しているのか、そしてこれらのトピックがどのような作品やコンテキストで登場し、いかなる役割を担っているのかという点を理解しているか問う。

分野・専門名： 西洋古典学

試験科目： 西洋古典学（問題2）

【正解・解答例】

解答のポイント

「ギリシア語・ラテン語における分詞の独立的用法」

・意味の上で状況や事情を示すための用法を分詞の独立的用法といい、主文の状況を示す副文の代わりとして用いられる。

・文脈に応じて「時、原因、条件、譲歩、様態」の意味を有する。

・ギリシア語では、独立属格を用いることが多く、主語となる名詞または代名詞が属格に置かれ、分詞も属格となる。分詞が対格で独立的に使用されることもあり、この場合は分詞が非人称的に扱われたり、不定詞を主語とする。

・一方のラテン語では、絶対奪格（独立的従格も可）と呼ばれ、主語となる名詞とそれを修飾する分詞や名詞などは奪格に置かれる。

など

「ギリシア・ローマの喜劇」

・ギリシア、ローマの喜劇の作例の代表的な著者・作品に言及すること（例：アリストパネース、メナンドロス、プラウトゥス、テレンティウス）。

・大ディオニューシア祭において悲劇の競演は前 534 年頃以降に行われるようになったが、喜劇の競演が加えられるようになったのは前 487 年頃とされる。

・現存最古の喜劇作品はアリストパネースによるものである。アイスキュロスの最古の悲劇作品以降、古典期においては、ソフォクレスやエウリピデスといった悲劇作家が排出されたが、ヘレニズム期において劇作は新喜劇（メナンドロス）が中心的役割を担った。

・もともとは豊穡祈願の祭りでの行事に起源があるとされる。話の内容としては、人々の実生活に根差した滑稽な事柄が主題となる。

など

分野・専門名： 西洋古典学

試験科目： 西洋古典学（問題 2）

【出題の意図】

ギリシア語・ラテン語特有の文法事項を理解しているのかを問う。また、劇作の変遷について理解しているか否かを問う。

分野・専門名： 西洋古典学

試験科目： 専門英文の読解

【正解・解答例】

今日英語の「*various*」という単語は、広範かつ抽象的な意味合いを持つが、ラテン語の「*varius*」の元々の意味はかなり明確である。キケロは、エピクロスの言ったことに関する議論の中で、「*varietas*」の意味について説明している。ここでエピクロスは、痛みが取り払われたとき、快樂は多様化しているが、増えることはないと述べている（*De Finibus* 2.3.10）。

著作権法で定められている公表された著作物を使用した入学試験問題に本ウェブページの公衆送信について著作権者より承諾を得ていないため、これを削除し、出典名等を記載することとします。

（永田康昭、兼利琢

也、岩崎務訳『キケロー選集 10 善と悪の究極について』岩波書店、2000年、68 頁、一部改変。）

「*Varietas*」は元々色に関連していたとするキケロの主張は、「*varius*」が農業書の中に登場するということからも裏付けられる。その最初の事例はカットーに見られ、彼は葡萄の成熟について、ひと房の葡萄がまだらになった（*varia*）時であるとしている。「*Varius*」という言葉に熟している葡萄に使うのは慣例表現となった。「*Varius*」はまた、秋の色彩を示す固有の語であり、それゆえウェルギリウスが「*varios fetus*」（*Georg.* 2.521）という時、彼が言わんとしているのは「様々な果実」ではなく、「色とりどりの果実」である。

もしも「*varius*」が熟していく葡萄の変色に用いられているのであれば、キケロが用いる「*disparibus (coloribus)*」は、私が訳したように「不均一、決まっていない」といった意味で使われており、「異なる」（色）という意味ではないだろう。彼が「*varius*」を詩、弁論、そして運の説明に使っていることから、「*varius*」は互いに異なる要素の集合体だけでなく、内的に均一ではない何か（変色した葡萄）に対しても使われたということが認められる。

分野・専門名： 西洋古典学

試験科目： 専門英文の読解

【出題の意図】

英語で「様々な」という意味を持つ「various」の元となった、ラテン語の「*varius*」が、どういった意味なのかについて書いた著書の一部である。言葉が持つ意味合いの変遷は古典語においてしばしばみられるが、この現象を正確に捉えているか、そして名前が登場する著者の述べるところを理解しているかを見る。

分野・専門名： 西洋古典学

試験科目： 西洋古典語（ギリシア語）

【正解・解答例】

ブラシダスとクレオーンが死んだので、アテナイ人達はラケダイモン人たちと休戦し、数年の間は平穏な状態であった。その後、大使たちはシケリアからアテナイへとエゲスタの人らによって送られた。当時彼らが戦っていたシュラクサ人らに対抗するため、アテナイ人らに同盟を請うために。そこでアテナイ人たちは、シケリアへ大使たちを送ることを決議した。彼らが到着すると、エゲスタの人たちは非常に多くの金を見せた。それは、あたかもその都市が非常に富裕であると思われたほどである。というのも、彼らは大使たちを欺くために、次のような策略をたてたのである。彼らは、大使たちを聖域へと連れて行き、非常に多くの捧げものを見せた。しかし、それらは銀に見せかけた、あまり価値のないものであった。また、私的な宴会の際に、エゲスタの中から金銀の杯を集め、また近隣都市からもそれらを宴会の場に集め、それぞれが自分の物であるかのように持ち込んで示したのである。

分野・専門名： 西洋古典学

試験科目： 西洋古典語（ギリシア語）

【出題の意図】

古典ギリシア語で書かれた平易な文章を、辞書の力をかりて読解できるかどうかを見ることで、西洋古典学を専攻する上で必要な能力を有するかを測る。